

## 徳之島の餅もらい行事

県文化財保護審議会委員 牧島 知子

### はじめに

奄美諸島には数多くの芸能や年中行事などが伝承されている。その一つに「餅もらい行事」がある。餅もらい行事とは、五穀豊穡や繁栄を願い歌い踊りながら集落内や家々を回り、餅や菓子をもらうものである。この行事は、各島・各集落によって呼称・行い方などはそれぞれである。

本年度、県教育庁文化財課が各市町村へ「餅もらい行事」についてアンケート調査を実施したところ、奄美諸島では奄美市笠利町各集落・名瀬上方地区の「タネオロシ」、龍郷町内全域の「種子おろし」、宇検村<sup>あしけん</sup>芦検集落の「ムチムレ」、大和村<sup>おわがま</sup>湯湾釜集落の「ムチモレ踊り」、瀬戸内町<sup>しほ</sup>芝集落の「芝のバツケバツケ」、喜界町<sup>なかがと</sup>の中里・塩道<sup>しおみち</sup>・早町<sup>そうまち</sup>・白水<sup>しらみず</sup>・花良治集落の「フユンミー（冬折目）」、徳之島徳之島町<sup>て</sup>手々集落の「手々むちたぼり」・尾母集落の「アキムチ（イッサンボー）」・花徳集落の「ムチタボレー」、天城町<sup>かぬく</sup>兼久<sup>にし</sup>・西阿木名集落の「ムチタボレ（アキムッチ）」、伊仙町<sup>いぬた</sup>犬田布<sup>ぶ</sup>・木之香<sup>きの</sup>・阿権<sup>あごん</sup>・馬根<sup>ばね</sup>・中山<sup>なかやま</sup>各集落の「イッサンサン」や「アキムチ」、上面縄<sup>うわおも</sup>・東面縄<sup>ひがしおも</sup>・目手久<sup>めてく</sup>・喜念<sup>きねん</sup>各集落の「ムチタボレ（ドンドン節）」や「タネブシ」等の回答があった<sup>※</sup>1。

その中から、徳之島の徳之島町・天城町・伊仙町に伝承されている「餅もらい行事」について、現地調査及び聞き取り調査を行った。

### 1 餅もらい行事について

徳之島の餅もらい行事については、先に述べたように「ムチタボリ」・「アキムチ」・「イッサンサン」・「タネブシ」など各集落によって呼称は異なるが、古くは（稲作が行なわれていた頃）旧暦10月から11月にかけて行われるタネツケ（種漬け、「タネムッチ」とも言う）の作業で、旧暦9月ごろ集落一斉に種籾を漬けることに由来する。そして、この日には鶏を潰し、餅を搗き五穀豊穡を予祝・祈願して、一晚中歌い踊って「モチモレ（餅もらい）」をした。つまり、「タネオロシ＝種蒔き」の行事に伴った一つの芸能といえよう。しかし、この時期だけでなくお盆や秋の彼岸・9月～10月・正月に行う集落もある。餅もらい行事の中で、訪れた家の庭先や道中で歌ったり踊ったりする際の唄は、「餅もらい唄」・「餅給れ（もちたぼれ）」といわれる。

餅もらい行事については、幕末の奄美の生活の様子を書いた『奄美史談』や『南島雑話』、明治中期に書かれた『徳之島事情』などに、古い餅もらいの様子が次のように書かれている。

『徳之島事情』

「秋餅西目間切りニ多シ」

『南島雑話』

「十月庚申并ともち祭り」

「種卸ノ節<sup>やま</sup> 倭ニ狂言 芝居ト云ヘキモノニテ 村々踊りアリク 年々に其仕形ハカハレリ 皆人ノ妻子共ナリ」

<sup>1</sup> 餅もらい行事については、集落内でも呼称が複数ある。本稿では、文献や聞き取り調査等から得た、代表的な名称を用いている。

「鬼面 ハツプロ<sup>\*2</sup> 種卸シ竹ノ皮ヲ用テ作=鬼面=。村中徘徊シ村童乞<sub>レ</sub>餅」

## 2 餅もらい行事の現地調査

### (1) 徳之島町尾母集落（調査日：2023年9月23日）

行事は「アキムチ（イッサンボー）」と呼ぶ。彼岸内（彼岸明けまで）の土曜日に行うこととなっており、日程は、青年たちが決める。参加するのは、尾母集落の子どもと大人である。

豊作祈願と、転入・新築の家などに対して家内安全などを祈願する。餅もらい唄を歌い踊りに入る家は、新築の家だけと決まっており、神社境内・公民館前庭・集落内（特に三叉路・四つ角等）で歌い踊る。

夜7時から集落内の溝川神社で儀礼（口上を述べ最初の唄を歌う、お神酒をいただく）を行って出発する。出発するにあたり、青年団はイッサンボー（神様の代わりに案山子様のもの）を持ち、子どもは竹製の松明を持つ。テギョウ（担ぎ棒）にティル（奄美諸島の運搬用具の一つ）を吊るし二人で担ぐ。

集落内を回るときはイッサンボーを掲げ持ち、チデン（太鼓）に合わせて唄を歌う。三叉路や四つ角等では、チデンに合わせて唄を歌いながら踊る。唄の歌い始めは、その年の干支から始まる。

チデンの音や歌声が聞こえてくると、近隣の家々から人々が出てきて餅・カッシャ餅の他、お菓子や飲み物、お祝儀などティルに入れる。ティルが一杯になると、伴走している車に移し入れる。餅（カッシャ餅）は、一戸あたり3個ずつ出す。近年、この餅もお菓子や飲み物に変わりつつあるという。踊りを依頼された家では、家に入るとき・家の中に入るとき・家の中で歌う唄など、その場に合った唄を歌う。家の中で歌い踊るのは大人だけで、子どもたちは外で歌う。また、イッサンボーも玄関の外で待機させる。集落を回り、公民館に帰りつくのは、夜9時過ぎだった。

公民館に戻ると、庭で歌い踊り、溝川神社での儀式を終えた後、祝儀以外のもってきた餅やお菓子などを溝川神社境内から、下の公民館庭へ向けて撒く。公民館の庭では、尾母集落以外の近隣集落の子どもたちも集まり、溝川神社から撒かれた餅を競い合っ拾う。

餅まきが終わった後、参加した子どもや集落の人々は帰り、行事の関係者は反省会后、解散となる。

「尾母集落 どんどん節」（集落所有 歌詞カード）

（歌い出し）いっさんがさーん（干支）ぬ年や かあうどうし

1 どんどん節はやてい 大和から はやていよ やがて徳之島や うちはやるんど

\*はらどんどんさまいとさんせー（各歌詞の最後に歌う）

2 今日のふうくらしいや 何時ゆうりも 勝ていよ 何時ま今日のぐうとうく あらちたぼれ

3 今年世のかわてい 二月雪 降らちよ 来年ぬ稲がなし 雪のまぐんめい

4 下い流る水な 桜花 うけていよ 愛女が手一し取たい

5 ういたわつきやよろてい 何時遊でい ねえたんがよ いーじゃる七月の 中ば頃よ

6 尾母の藤清主ーや とれ牛ぐわ むっちゆてよ 南当のしーぢ下い あんぐいちかち

7 六十一 願てい 七十三や 願ていよ 八十八願てい 九十九までも

<sup>2</sup> 九月十月の頃 村々の童共が種おろし、種おろし祭りといって竹の皮で鬼面を作り、村中家ごとに種おろし餅を乞い歩きヶ所に餅を集めて煮て喰る。

- 8 むちもろせもろせ だぐむち もろせよ もろさだてからや ていがらせるんど  
 9 山のかんだぐあさえ 木ぐあとうめてい まあきゆりよ わつきやま いんがのくあの  
めれぐあとうめら  
 10 わつきやや なんぼ子供 継ぎ唄やしれらいよ 昔うやほんきやの 真似どせたんど  
 11 花徳ぬ為清主や 米富貴者やあしがよお 餅貫れが行じやと 摘切ち給ち  
 12 山の木のかささや とうびいら木のかささよ 島うりいていくささや くあむちうなぐ  
 (家に入る前に唄う歌)  
 13 門口の唄や 無礼ながらやしがよ 吾達がしゆる事や 許ち給れ

写真1 徳之島町尾母集落のアキムチ（イッサンポー）①（2023年撮影）



①溝川神社案内板



②溝川神社での儀礼



③溝川神社を出発する



④溝川神社を出発する



⑤依頼された家の中で歌い踊る



⑥イッサンポーは家の外で待つ

写真2 徳之島町尾母集落のアキムチ（イッサンボー）②（2023年撮影）



⑦辻で歌い踊る



⑧お菓子を入れたティル



⑨帰ってきて公民館で踊る



⑩溝川神社からの餅まき



⑪餅まきで拾った餅・お菓子など



⑫カッシャ餅

(2) 徳之島町花徳（上花徳）集落

行事は、「ムチタボレー」と呼び、「餅をください」という意味である。現在、上花徳と前川の2つの地区で行われている。いずれも、かつては1月16日に行われていたが、現在、上花徳は正月の帰省客にも楽しんでもらうために1月4日に、後述の前川は子どもの行事のため冬休み期間の土曜日の夜、行うとして今年は1月6日に行われた。

花徳集落（上花徳）の現地調査（調査日：2024年1月4日）

子どもたちが仮装し、唄を歌いながら各家々を回る。以前は子ども会が中心であったが、最近では婦人会が中心である。吊いのあった家は回らないとしており、昨年は集落内で吊いが多かったため各戸を回らず、一部の家の庭先と集落内の大通りで唄と踊りが行われた。6年生の子ども



写真3 徳之島町 花徳（上花徳）のムチタボレー（2024年撮影）



①三味線を弾く人とチヂンを叩く人



②大通りでの見物人と仮装して踊る人



③依頼された家の庭先で踊る



④公民館での踊り



⑤飾り付けたティル

が中心になり、一つの組は10人～15人で構成される。参加する子どもと大人は、それぞれ各家庭で仮装し、三味線を弾くのは3人で着物姿の人もある。もらったお土産や祝儀を入れるティルはきれいな飾りつけがされ、1人が肩からかけて持つ。

太鼓（チヂン）・三味線（サンシル）に合わせて、道を歩きながら広い所で歌い踊って餅や祝儀をもらう。昭和50年頃から、餅から祝儀に変わったようで、これは減反政策で田を畑に転換

写真3 徳之島町 花徳（上花徳）のムチタボレー（2024年撮影）



①三味線を弾く人とチヂンを叩く人



②大通りでの見物人と仮装して踊る人



③依頼された家の庭先で踊る



④公民館での踊り



⑤飾り付けたティル

が中心になり、一つの組は10人～15人で構成される。参加する子どもと大人は、それぞれ各家庭で仮装し、三味線を弾くのは3人で着物姿の人もある。もらったお土産や祝儀を入れるティルはきれいな飾りつけがされ、1人が肩からかけて持つ。

太鼓（チヂン）・三味線（サンシル）に合わせて、道を歩きながら広い所で歌い踊って餅や祝儀をもらう。昭和50年頃から、餅から祝儀に変わったようで、これは減反政策で田を畑に転換

したためである。もらった祝儀は、子ども会や婦人会等で分ける。

例年、公民館に集まり2組に分け、その組々で回る順番を決め、最後に公民館に集まり、皆で踊った後、ぜんざいやごちそうを食べる。今年は、集合場所の「いこいの家」に6時ごろ集合し、その近くには先導する消防車が待機する。上花徳集落の中心部分にある「いこいの家」から出発し、「上花徳研修館」までの道を消防車の先導で約1時間にわたりムチタボレーが行われた。大通り以外でも、途中数軒の依頼された家の庭先で三味線・チヂンに指笛・唄に合わせて踊る。三味線を弾く3人が、唄も歌う。太鼓4人、指笛1人で、タンバリンを叩く人もいた。また、鍋蓋など、音の出るものを叩いたりもする。ティルの中には、お菓子や祝儀などがたくさん入れられ、貰ったお菓子などは研修館で参加した子どもたちにそれぞれ分ける。祝儀はその場で金額も披露され、活動費として使用されることについて皆の了承を得る。

研修館に戻って踊り終わった後は、婦人会が中心になって慰労会の準備がされており、参加した皆はおしるこやお菓子、飲み物等を食べながら歓談した。

唄は島口のため、微妙な発音が難しい。子どもたちに伝承していく上では、島口での練習が課題である。

#### 餅貰い唄（本郷 1978「餅貰い唄（どんどん節）」）

- 1 餅<sup>つば</sup>給<sup>たま</sup>れ 餅<sup>つば</sup>給<sup>たま</sup>れ 祝<sup>いわ</sup>ぬ餅<sup>つば</sup>給<sup>たま</sup>れよ 給<sup>たま</sup>らだあてからや 手柄<sup>て</sup>せんど  
\*ハラドンドンセ サマイトサンセ（各歌詞の最後に歌う）
- 2 今日<sup>けふ</sup>ぬ誇<sup>こほ</sup>らしやや 何日<sup>なんじつ</sup>よりも勝<sup>かち</sup>りよ 何日<sup>なんじつ</sup>も今日<sup>けふ</sup>ぬ如<sup>ごと</sup>に あらち給<sup>たま</sup>れ
- 3 餅<sup>つば</sup>慾<sup>ほ</sup>さやちあらんど 御飯<sup>ごはん</sup>慾<sup>ほ</sup>さやちあらめよ 元<sup>もと</sup>ぬ親<sup>おや</sup>先祖<sup>せんぞ</sup>達<sup>たち</sup>ぬ 真似<sup>まね</sup>どせんど
- 4 奥<sup>おく</sup>方が餅<sup>つば</sup>や 青香<sup>あおか</sup>さ美味<sup>あじ</sup>さよ うれが恩<sup>おん</sup>ぬ声<sup>こゑ</sup>や 踊<sup>う</sup>て差<sup>さ</sup>上<sup>あ</sup>ら
- 5 花<sup>はな</sup>徳<sup>とく</sup>ぬ為<sup>ため</sup>清<sup>きよ</sup>主<sup>しゅ</sup>や 米<sup>こめ</sup>ぬ親<sup>おや</sup>ち言う<sup>い</sup>うしがよ 餅<sup>つば</sup>貰<sup>もら</sup>えが行<sup>い</sup>ちやと ちんきち給<sup>たま</sup>ち
- 6 池<sup>いけ</sup>な水<sup>みづ</sup>溜<sup>ため</sup>めて 水路<sup>みづち</sup>下<sup>した</sup>だい張<sup>は</sup>らちよ 来<sup>き</sup>年<sup>ねん</sup>ぬ稲<sup>いね</sup>加<sup>か</sup>奈<sup>な</sup>志<sup>し</sup> 哇<sup>わ</sup>枕<sup>まくら</sup>
- 7 三<sup>さん</sup>間<sup>げん</sup>家<sup>や</sup>建<sup>た</sup>てて 二<sup>に</sup>間<sup>げん</sup>に三<sup>さん</sup>間<sup>げん</sup>いせてよ 明<sup>あ</sup>い障<sup>やま</sup>子<sup>こ</sup>立<sup>た</sup>てて 匂<sup>かほ</sup>い香<sup>か</sup>さ
- 8 やがて秋<sup>あき</sup>利<sup>り</sup>神<sup>かみ</sup> 餅<sup>つば</sup>貰<sup>もら</sup>えが来<sup>き</sup>ゆしが 如<sup>ごと</sup>何<sup>なん</sup> あたらさ物<sup>もの</sup>ぐわま 一つ<sup>ひとつ</sup>給<sup>たま</sup>れ
- 9 大<sup>おほ</sup>島<sup>しま</sup>七<sup>しち</sup>間<sup>げん</sup>切<sup>きり</sup> いきど一<sup>いち</sup>間<sup>げん</sup>切<sup>きり</sup>よ 永<sup>なが</sup>良<sup>ら</sup>部<sup>ぶ</sup> 鳥<sup>とり</sup>島<sup>しま</sup>ぬ次<sup>つぎ</sup>や大<sup>おほ</sup>和<sup>わ</sup>
- 10 どんどん節<sup>ふし</sup>がはやる 赤<sup>あか</sup>木<sup>き</sup>名<sup>な</sup>がはやるよ やがて君<sup>きみ</sup>ぬ島<sup>しま</sup>や うち<sup>うち</sup>はやるよ

### (3) 天城町西阿木名集落

行事は、「ムチタボレ（アキムッチ）」と呼ぶ。「西阿木名集落における伝統芸能群」の一つとして、天城町無形民俗文化財に指定されている。

実施日は、旧暦の8月7日から14日の庚<sup>かのへ</sup>の日である。昔は青年たちが豊作祈願のために行っていたが、現在は高齢化のため子どもたちに伝承しようと取り組んでいる。

行事は明治以前から行っていたが、昭和40年頃から変化したという。当時はボロ布・仮面を被って誰か分からないように仮装し、現在は子どもも大人も仮装して参加している。ティルとザルを持って回り、ザルにももらったお菓子や餅をティルに移し入れる。かつては白丸餅であったが、現在はお餅はほとんどない。また、以前は若者は酒を飲んで酔っぱらい、畑に寝る者もいたという。不幸のあった家や都合の悪い家は、回らない。家々を回るのも昔は歩いて回っていたが、今は班（組）を分けて青年団の車に乗せて回る。組分けは全戸数120戸を二つに分けて実施する。集落範囲が広いため、かつては夜中までかかっていたという。唄は6番まであり、練習は

写真4 天城町西阿木名集落のムチタボレ（アキムッチ）



①仮装して家々をまわる



②各家々で歌い踊る



③各家々で歌い踊る



④歌い踊った後、もらったお土産



⑤訪問した家でテークを叩いて出迎える



⑥訪問先でお菓子のもてなし  
(98歳女性の手作りソーダムッチ)



⑦もらった餅・お菓子を分配する



⑧もらった餅・お菓子を分配する



西阿木名民謡保存会が学校の伝統芸能の時間に指導する。西阿木名集落のムチタボレの唄は、徳之島町の唄と節（メロディー）が異なる。

#### ムチタボレ（アキムッチ）の現地調査（調査日：2023年10月21日）

2023年は行事が多く、例年と日程を変えて10月21日に実施された。公民館を出発したのは午後6時、公民館に戻って来たのは午後9時過ぎであった。特に儀礼はなく、係の合図で出発し、それぞれ帰ってきたかを確認する。子どもたちは、山海留学生を含めて20人程で西阿木名集落や三京の子どもらが参加する。軽トラックに、仮装した人々とティル・ザル・太鼓（テーク）等の道具類を乗せ、秋利神方面と伊仙町との町境方面からの二班に分かれて出発した。それぞれの地域を回って出会った場所が合流点となるため、毎年合流点は異なる。2023年は、中郷地区が合流の場となった。

かつてはテーク・三味線・指笛に合わせて歌い踊っていたが、今は三味線を弾く人がいなくなったため、テークに合わせて唄を歌い踊っていた。テークは各戸を訪問する時や歌いながら踊るときに叩き、テークが先頭に立つ。指笛を吹く人もいる。必ず1番を歌いながら門に入る。

訪問する家では、餅（お土産という）を袋等に入れて準備してあり、歌い踊っている最中にティルやザルを持った二人が前に進み出るとお土産を入れる。お土産をもらうとさらにテークの音が大きくなって歌い踊り、6番の御礼の唄を歌いながら引きあげる。二つの班は、それぞれの受け持ちの集落内を回って最後は公民館へ戻り、お土産にもらったお菓子や飲み物等を子どもに人数に分配した。祝儀は子ども会の活動費となる。

中には、テークの音が聞こえると訪問する家の方が自らテークを叩いて出迎えたり、玄関先に出て踊って出迎えるところもあった。また、年配者や今年生まれの子どもを抱えて外に出て、子どもを披露しながら楽しむ若い人もいた。今年の合流点の中郷地区では、98歳の女性が朝からふくれ菓子（ソーダムッチ）を作ってアキムチで来る人を待っていた。このように、手作りのお菓子や飲み物・果物（ドラゴンフルーツ等）で訪れた人々をもてなすところもあり、集落の人々が餅もらい行事を楽しみ、行事を通じてつながりを持っている様子がうかがえた。

#### 餅貰れ唄（集落住民の歌詞カード）

- 1 エー かどうぐちーぬ うたーや ぶりなーがら やーしがよ  
むんぬしらーぬ わきやーや ゆるちーたぼれい  
\*はらどどん さまいとさんせー ア ムチムチ ムチムチ（各歌詞の最後に歌う）
- 2 エー やがてい あきぎゃんかーら むちむーれが けーゆしがー  
あたらしよいしよらていんまー ひとつー たぼれい
- 3 エー むちたぼーれい たぼれい むち たーぼち たーぼれいよー  
むーちぐわ たーぼちゃん ていんまーや ていがら うえせんど
- 4 エー けいどうぬ ためいきんしゅーや くめいぶーぎんち きーちゃしがー  
むちぐわ もろいが いーじゃとう ちんきりー むちぐわ
- 5 エー むちふさーま あーらーじ さけいふーさま あーらじーよー  
むーかし うーやふじぬー まねーど せーたんど
- 6 エー くまぬ あーじゃとう あーまーや むちたーぼち おーぼらさ  
やーにぬ いーにがなしーや あぶしー まくら

### 3 餅貰い行事の聞き取り・文献調査

(1) 徳之島町手々集落 (2022年10月練習視察, 2023年9月25日 手々集落・T氏聞き取り)

行事は、「むちたぼり」と呼ぶ。手々むちたぼり<sup>※3</sup>は、300年以上前から伝わるとされ、徳之島町無形民俗文化財に指定されている五穀豊穰を祝う行事である。かつては、旧暦の盆7月15日に行っていたが、現在は夏休みに帰省した人々にも楽しんでもらうため、月遅れの盆である8月15日に行なっている。

古くは二期作を行っており「アキムッチ」、「タネムッチ」といって役人からフレ（通知）が回ると、各戸餅をついて夜を徹して踊り廻って豊作を感謝し、五穀豊穰を祈願した。「アキムッチ」は、秋の取入れが済んだ旧暦7月終わりから8月初め頃に餅をついて感謝するもの、「タネムッチ」は旧暦9月頃に役人が吉日を選んで一斉に種籾を水に浸け五穀豊穰を祈願するものである。また、旧暦7月15日は先祖が持ち帰るみやげとして餅をついていたが、2ヶ月に3回も餅をついていたのを役人が経済改善で1回にしたという。

楽器はチヂン1人・三味線3～4人で、男性4人・女性3人の唄部があり、チヂン・三味線を弾きながら歌う。唄は10番まであり、唄減らしで引きあげていく。この唄減らしは、どの歌詞かは決まっておらず、臨機応変に行う。

男性は右手に扇子、左手に長さ30cmほどの棒を持ち、頭から全身に白い布を被る。男性の持つ棒は警察官の棍棒を意味しており、明治時代に巡査が赴任してきたときの格好を真似ている

#### 写真5 徳之島町手々集落のむちたぼり (2022年・2023年撮影)



①踊りのようす (練習)



②踊りのようす (練習)



③手々むちたぼりの唄部 (楽器を弾きながら歌う)



④学校での披露 (2023年・徳之島町教委提供)

<sup>3</sup> 徳之島町指定無形民俗文化財の名称は「手々ムチタボリ」である。

という。以前は、刀を差して踊ったこともあった。女性は浴衣を着て頭に斜め紅白柄の手拭いを被り、手に紙の花飾りを持つ。現在は省略しているが、2005年までは先頭にはアンゴという引率者がいた。アンゴは女装した男性で、傘を半開きにし、後ろに酒を入れた二合徳利を下げていた。

昔は、集落内全戸数を回っており、人数が多かったので子どもは集落内を二つに分けて午後6時頃から回り、大人は全戸数を回った。回ったあとは学校の校庭に集合し、そこで踊った。現在は、集落内が5組合あるのでそれを2組2つと1組に分け、1組はお祝いがあって希望する家を一軒ずつ回り、大人と子どもと一緒に回るようにした。悔み（喪中）の家は、一年間参加しないし、その家にも行かない。2023年は、学校で子どもたちに呼びかけ、全員参加とした。午後7時30分頃、学校に集合して踊った後、殿地、5つの小組合などを踊り、終了後は学校へ戻る。各戸で踊るのは5～6分程で午後9時頃には学校へ戻り、そこで踊って午後11時頃終了となる。

餅もらいの餅は、お盆に用意した白い丸餅である。今は、お菓子が多い。以前は、ティルを背負って持ち運ぶ人もいた、今は一輪車で運ぶ。もらったものは、学校で分配する。また、ムチタボリには各家庭から200円～300円の寄付を出し、このお金が運営費になる。

### (2) 徳之島町花徳（前川）集落（2023年1月6日 花徳（前川）集落・T氏聞き取り）

行事は、「ムチタボレー」と呼ぶ。現在は子どもの数が少なくなり、大人も加勢して行っている。面やカツラをかぶって仮装をし、かつては誰か分からない程に仮装していた。

通常は公民館に集合して集落内を回り、公民館に戻るルートであるが、今年は個人宅を3軒回ったところで雨が降り出し、公民館に戻って歌い踊って過ごした。回るときは、5～10人ほどの組を作って回る。楽器は大人2・3人が三味線を弾き、太鼓は4・5人で鍋蓋等の音の出るものを持って参加する。かつては子どもだけであり、三味線はなかったようである。

集落ではお菓子や祝儀をもらい、公民館で反省会をしながら皆で分けて食べ、残ったお菓子は分ける。祝儀は子どものみで実施していた時は均等に分けていたが、現在は子ども会と加勢した老人会・婦人会で分ける。かつては白い丸餅であったが、減反政策で昭和46年頃からなくなった。

唄は、上花徳と同じで、学校で餅もらいの唄やワイド節といった島唄や島口を練習しているため、子どもたちも歌うことができるが、カセットテープも準備している。

### (3) 天城町兼久集落（文献）

行事は、「モチタボレ」と呼ぶ。2023年は、8月27日に日に行われた。例年、旧盆の後で行うことになっている。

向井一雄（2017）には、モチタボレ（原文：ムチタボレ）について次のような記載がある。

期日と時間について。ムチタボレはブン（お盆）やハマウリが終わって数日後にやった。区長さんが日柄を見て決定していた。時間は日が沈んでから。

参加者とその姿について。今は子どもたちが家々を回っているが、昔は青年たちが回っていた。五～六人が一組となって、大勢の組が回っていた。青年たちは頬かむりをして顔を隠していた。仮面などは被っていなかった。一組に最低でも一人はサンシール（三線）を弾ける者がいて、ドンドン節（ムチタボレ唄）歌いながら家々をめぐる

ていた。家々でお酒（焼酎）をもらって、ムチタボレが終わって家に帰るころにはだいぶ酔っぱらっていた。そうして回るのが楽しみだった。

ムチタボレで歩く範囲と稲作の家について。自分たちはく自宅はシンムラの方が、集落の北側の天城中学校のあたりの家々を回った。あのあたりの人たちは稲作をやっている家が多く、クラ（倉）などもありたくさんムチがもらえるので、そこに行っていた。自分たちの方の家々は集落の南側にあたり、畑作地帯でウギ（サトウキビ）やサツマイモなどを栽培する家が多い。原商店から北側は、昔は、天水田ばかりで、兼久の稲作地帯であるサームト（坂本、字名）に近いから稲をいっぱい持っていた。

ムチの分配について。回った家の先々でムチ（餅）をもらうが、すべて回りきったあとに、参加者で等分に分けた。たまに酔っぱらいすぎて、その日にムチを分けることができずに、翌日になって分けることもあった。

また、島尾（1976）には、「7月浜下りが終わって一週間目にあたる日に行う行事である。子どもたちを楽しませる行事の一つであり、また、豊作を祝う行事でもある。（中略）子どもたちが餅貫いの唄を歌いながら各家々を訪問して餅を貰う習慣である。（中略）当日子どもたちは2・3人の仲間をつくって面で顔を隠しいろいろな衣装で身をかため、各家々をもれなく訪問して餅を貰う。各家々は子どもたちのために多くの餅をこしらえておく。そして子どもたちの訪問を待っている。（以下略）」とある。

#### （4）伊仙町犬田布集落（2017年調査，2023年9月23日 犬田布集落・S氏聞き取り）

行事は、「イッサンサン」と呼ぶ。イッサンサンは唄と踊りによって、今年の豊作を祝い来年の豊作と家内安全（幸運）を祈願する行事である<sup>4</sup>。

実施日は8月から9月の十五夜に近い戊申（つちのえさる）の日と決まっているが、2023年は都合により10月20日に実施した。イッサンサンに使う道具類はイッサンボーという案山子様の人形、チヂン（太鼓）2人、ティルである。午後5時半ごろ、子ども・PTA・保護者がイッサンサンの記念碑に集まって餅（カシャ餅）を供える。出発の儀式は、酒をイッサンサンの碑に供えて「今からはじめます」と伝える。午後5時半頃から9時半頃まで各戸（犬田布集落は170戸数）を、イッサンボーを持って回り、公民館に戻ってくる。各戸の回り方は、上組（今年）・中組（来年）・下組（再来年）と輪番になっている。また、以前は小学生・中学生・高校生と別々に行っていた。

イッサンボーの顔はワラと縄で作る、白い紙を貼って顔を描く。頭には麦わら帽子を被せ、手は左右5本ずつ指を作る。体は棒にワラと縄を巻き、その上をゴザで巻いて浴衣を着せる。イッサンボーは果報をもたらす神様という扱いのため綺麗にしておく。イッサンボーは道中持ち歩き、各戸の門口に来た時子どもがイッサンボーの中に入り歌に合わせて自由に踊る。踊り方に決まりはなく、各家々を回ると、餅を出してくれるまで歌い踊る（5分程）。楽器はチヂンの2人だけで、手拍子で唄を大声で歌う。唄は、門口に近づいたら歌う唄、家の庭先で歌う唄、家を出るとき歌う唄がある。以前、青年団はチヂン・三味線で回っていたが、今は子ども会（育成会）が中心になって行っている。学校でも、学習発表会の時に唄の練習をするようである。各家々を

<sup>4</sup> 詳細は、『鹿兒島の祭り・行事』に詳しく掲載してあるので参考にされたい。



写真6 伊仙町 犬田布集落のイッサンサン（2017年撮影）



①イッサンサンの記念碑



②記念碑の前での出発前の儀式



③門をはいる際の唄を歌う



④訪問した家で歌う



⑤唄を歌った後イッサンボーに御神酒をかける



⑥もらった餅

回る際、イッサンボーの麦わら帽子に焼酎をかける。また、塩を手を受け、少し舐めてから残りの塩を頭にかき、焼酎と塩で清める。各家々では、焼酎をカラカラに入れ仏壇（祖先）に供えたものをイッサンボーに供える（かける）。また、各家では餅を当日の午前中に作り、「今日はイッサンサンの日ですから召し上がってください」といって仏壇に供え、それを子どもたちにあげる。

子どもたちはもらった餅やお菓子、飲み物、焼酎、祝儀等をティールに入れてもらい、いっぱいになったら別の袋に移して伴走の車に入れ、公民館へ運び皆で分配する。

(5) 伊仙町面縄集落（文献・映像）

行事は、「ムチタボレ（ドンドン節）」と呼ぶ。2023年は、10月28日に行われた。

映像等によると、チヂンは大人4人・子ども1人で、仮面を被っている人が数人いる。訪問し

た家の外縁に子どもたちが上がり込んで踊り、家の人も外に出て踊る。訪問先で子どもたちはお菓子、大人はビール等をもらう。お土産は、お菓子や飲み物、祝儀などである。

『南日本文化研究所叢書』(1996)によると、「面縄・目出久・佐弁・喜念では10月29日(旧暦9月15日の癸卯<sup>みづのと</sup>)の夕方から稲作儀礼の最高儀礼として昔から伝わってきた「秋ムチ=もちたぼれ」行事を行った。ところが水田は全部休耕田となったため新しいもち米がなくモチの代わりにミカンですませた。午後6時から8時頃まで仮装した小学生たちが太鼓の代わりにブリキ缶を叩いて家ごとにモチタボレの唄を歌って踊り回った。家々では餅の代わりにミカンや菓子などを用意して接待した。一方青年や婦人たちも、それぞれ思い思いの仮装をしてグループごとに太鼓・三味線でモチタボレの唄で家ごとに回った(略)」とある。このことから、休耕田となったため行事をやめた集落も出てきたことが分かる。

また、2017年の聞き取り調査時のメモによると、面縄は犬田布のイッサンサンの「イッサンボー」のようなシンボルはない。集落公民館などを起点に、子どもや青年・婦人会などがグループに分かれて三味線・太鼓を持って家々を回り、家の庭先で歌や踊りを披露する。家主から餅や酒・お菓子、子供たちにはサタンテンプラ(サーダーアングギー)や駄菓子などが振る舞われた。もらったお菓子などは、公民館で分配されていた。

## おわりに

かつて、徳之島のほぼ全域にあったであろう餅もらい行事について、現地調査や聞き取り調査を実施した。上記したものを含め、現在実施しているところは、以下の8集落9つである。

徳之島町 手々集落(手々むちたぼり)、尾母集落(アキムチ)、  
花徳(上花徳・前川)集落(ムチタボレー)、  
母間集落<sup>5</sup>(モチタボリー)

天城町 西阿木名集落(ムチタボレ(アキムッチ))、兼久集落(モチタボレ)

伊仙町 犬田布集落(イッサンサン)、面縄集落(ムチタボレ(ドンドン節))の8集落

徳富重成氏は、餅もらい行事を、①花徳集落の旧暦1月16日、②手々集落の旧暦7月15日(現在、新暦8月15日)の盆、③尾母集落の秋の彼岸、④面縄集落の10月のタネブシの4つに分類している(徳富1971)。

このことから、徳之島内で行われている餅もらい行事を今回調査した7集落に当てはめると、①徳之島町花徳集落の旧暦1月16日(送り正月)、②手々集落の旧暦7月15日(現在、新暦8月15日)の送り盆・天城町西阿木名集落のモチタボレ(旧暦の8月7日~14日)・犬田布集落のイッサンサン(旧暦の8月15日前の申の日)、③尾母集落の秋の彼岸、④伊仙町面縄集落の10月のタネブシ(ムチタボレ)、となる。

集落では、子供たちから大人まで参加して行事が実施、伝承されている。稲作がサトウキビ畑に変わったにもかかわらず、餅もらい行事が現在も行われ、餅からお菓子や飲み物・祝儀に変わっても続いていることに、集落をあげて子どもたちへ文化の大切さを伝えていると感じた。

餅もらい行事は形を変えながらも、集落全体で伝承していこうという気持ちを持って取り組んでいることに意義があり、貴重な伝承文化を絶やさないためにも保護していくことが大切であろう。

<sup>5</sup> 令和5年は12月17日に実施された。

## 謝 辞

最後になりましたが、餅もらい行事調査に際し、天城町教育委員会具志堅亮氏、西阿木名集落の山田三千男氏・仲恵氏、伊仙町教育委員会安田未来氏・與嶺友紀也氏、佐藤隆志氏、徳之島町教育委員会大屋匡史氏、徳之島町文化財保護審議会会長町田進氏、徳之島町文化財保護審議会委員富田保子氏、政武文氏、琉隆男氏、上花徳集落区長の保岡盛寿氏、原田辰法氏、政岡良治氏、尾母集落・花徳集落・西阿木名集落の皆様には大変お世話になりました。心からお礼申しあげます。また、県教育庁文化財課眞邊彩氏には、調査に同行いただき、また追加調査時に御助言・御教示をいただきましたことに心より御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 天城町文化財活性化実行委員会編 2018『平成二十九年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産総合活用推進事業）天城町「文化遺産」調査報告書（1）兼久採集手帖～地域住民との協働による天城町「文化遺産」調査報告書』天城町文化財活性化実行委員会
- 伊藤幹治 1980 『沖縄の宗教人類学』弘文堂
- 大村達郎 2012 「奄美徳之島の「餅貰い行事」今昔—豊作を感謝・祈願する稲作行事—」『東洋通信』第49巻9号 東洋大学通信教育部
- 鹿児島県教育委員会 2018「イッサンサン 伊仙町」『鹿児島県の祭り・行事—かごしまの祭り・行事調査事業報告書』鹿児島県教育委員会
- 国分直一・恵良宏校注 1984 『南島雑話2 東洋文庫432』平凡社
- 徳富重成 1976「徳之島のムチムレ行事—面縄での聞書」『奄美の文化 総合的研究』法政大学出版局
- 土岐善作 1976「我が村の風俗習慣（徳之島天城町兼久）」『奄美の文化 総合的研究』法政大学出版局
- 徳富重成 1971「徳之島手々の年中行事」『南東研究』第12号
- 日高良廣・前原隆鋼 2006『奄美のわらべ歌と遊び1—与論島・沖永良部島・徳之島編—』南方新社
- 本郷宏 1978『徳之島誌 第一巻』徳州古今史研究会
- 鹿児島短期大学南日本文化研究所 1996『南日本文化研究所叢書21 徳之島採集手帖—徳之島民俗の聞き取り資料—』鹿児島短期大学南日本文化研究所
- 名瀬市史編纂委員会 1964『奄美史談・徳之島事情』名瀬市史編纂委員会